

今日きょうは神様かみさまの独り子ひとこ、イエス様イエスさまの母ははであり、神様かみさまを信じるすべての人の母ははである聖母せいぼマリアの被ひ昇天しょうてんを記念する祭日きねんさいじつです。神様かみさまはご自分じぶんの独り子ひとこであるイエス様イエスさまの母ははマリアの御身おんみが、お墓はかの中で腐ふ敗はいすることがないように、聖母せいぼの魂たましいと御身おんみを天てんに上げられました。これは勿論もちろん、聖書せいしょには書かれていませんが、教会きょうかいは1950年11月1日、教皇ねんがつにちピオ12世きょうこうせいを通して、教会きょうかいの聖なる伝承でんしょうに基づいた聖母せいぼの被昇天ひしょうてんのことを、信仰しんこうのあるすべての人が信じるべき「信仰しんこうの項目こうもく」として宣言せんげんしたのです。神様かみさまはイエス様イエスさまの母ははとして選ばれたマリアがどんな汚れよごもないまま生まれ、また、その清さきよを保ったまま天てんに上のぼるととされました。これはマリアにおいては、自分じぶんのすべてを神様かみさまに任せたとことに対する報むくいですが、信じるすべての人ひとにおいては、マリアと同じ報おなむくいが与えられるという希望きぼうをもたらしてくれることでもあります。言い換えれば、私わたしたちも一生いっしょう神様かみさまの意向いこうに忠実ちゅうじつに従したがった聖母せいぼマリアのように生きたなら、神様かみさまは私わたしたちを永遠えいえんの命いのちに与あずかることができるようにしてくださるということでしょう。そういう意味いみで、今日きょうは聖母せいぼマリアの従順じゅうじゆんについて、信者しんじゃの皆さんと一緒いっしょに黙想もくそうしたいと思います。

おもいます。

今日きょうの福音ふくいんで、天使てんしガブリエルから神様かみさまのお告げを受けたマリアは、もう年寄りとしよとなっていたエリザベトたずを訪ねました。それはエリザベトが神様かみさまによって、男おとこの子こを身みごもっていることをガブリエルから聞きいたからでしょう。でも、マリアの訪問ほうもんはただその事実じじつを確かく認にんするためではなく、神様かみさまが旧約きゅうやくの歴史れきしを終おえ、新あたしい契約けいやくの歴史れきしを開ひらき始められたことを表あらわすための訪問ほうもんでした。そういう観かん点てんから見みたら、今日きょうのマリアの訪問ほうもんは、神様かみさまに導みちびかれて成なされたことだと理解りかいすることができます。聖母せいぼマリアは、もう自分じぶんの人生じんせいを神様かみさまに任せ始めたのでしょ。それはエリザベトの挨拶あいさつの言葉ことばを通しても分わかりますが、彼女かのじょは自分じぶんと自分じぶんの胎内たいないのヨハネが、マリアとマリアの胎内たいないのイエス様イエスさまに出で会あった喜よろこびをその挨拶あいさつを通して表あらわしました。その時とき、エリザベトは「主しゅがおっしゃったことは必かなず実現じつげん

すると信じた方は、なんと幸いです。」と挨拶しました。それは聖母マリアの強い信仰を誉めることで、その信仰があったからこそ、マリアは常に神様に従うことができたわけです。事実、その信仰とそれに基づいた従順は、神様が成し遂げようとされる救いの計画の完成において欠かせない大事な姿勢で、ある意味、神様の救いの計画そのものだとも言えます。わたしたちはそれをマリアの賛歌を通しても分かりますが、その歌が旧約の民の不信仰や不従順をあらわにしながら、神様の救いの御業とは、「その不信仰と不従順から神様のもとに立ち返る」ことを示しているのです。

そのマリアの歌の最後には、「アブラハムとその子孫」という言葉が記されていますが、それは神様に従順とした人たちを表す言葉でしょう。言い換えれば、神様の救いは神様に素直に従ったアブラハムのような人たちに与えられるということで、マリアの歌はアブラハムのような人たちに報いてくださる祝福と、そうではない人たちに与えられる不幸について語っているのです。アブラハムは神様に逆らって罪を犯したアダムとエバの子孫でしたが、彼は自分の息子のイサクを神様に捧げるほど神様を信じ、また、神様に従う人でした。神様との契約はそのアブラハムを通して結ばれたものでしたが、むしろ、彼から始まったイスラエルの歴史は、神様に逆らうばかりの歴史だったのです。しかし、神様はその愚かな民を憐れみ、今度は、ご自分の独り子を人間の救いのためのいけにえとされました。そのイエス様の従順については、今日の第2朗読がよく語っていますが、イエス様は神様に不従順であったアダムから始まった罪と死の歴史を、十字架の死に至るまでの死によって終え、ご自分に従って真心から神様を信じるすべての人が神様の救いに与えるようしてくださいました。そして神様はその救いの計画がイエス様のように、神様を信じ、自分を捨てて神様だけに従う人々、つまり、「教会」を通して続くことを望んでおられるのです。ということで、教会はイエス様の母であるマリアを自分の母としていただき、神様を信じる人々を生み出し、神様の子供たちを増やしてい

くのです。

今日の福音で聖母マリアは、神様の救いの計画を前もって見て、喜びの中で神様をたたえました。考えてみたら、神様の救いの計画はナザレの純朴なおとめマリアの信仰と従順の心から始まったと言っても、それは過言ではありません。天に上げられた聖母マリアは、今もすべての人の救いのために神様に祈っておられます。私たちも、聖母マリアのように、真心からの信仰と素直な従順、また、神様と人々への愛を持って、すべての人の救いのために働くべきです。そうすれば、私たちも聖母マリアのように、神様の永遠の命に与れるでしょう。

さて、今日は日本においては終戦記念日ですが、韓国や東アジアの他の国においては植民地の国民という身分から解放された日であります。それぞれが同じ日の異なる感情があるでしょう。しかし、それに拘るのは、イエス様の命を代価として贖われた人々である私たちには、相応しくないことだと思います。今日、聖母マリアは自分の愚かで恥ずかしい罪の歴史を顧みながら、イエス様による新しい歴史の喜びを歌いました。過ぎ去った歴史だからと言う理由で、それに素直に向き合わないならば、人類の歴史は結局変わらないと思います。私たちは教会という同じ母から生まれた神様の子供たちで、だからこそ、イエス様が示してくださった愛による平和のために務めるべきです。どうか、私たち一人一人が神様の平和の道具として使われるよう、今日のミサの中で心を込めてお祈りいたします。